

スイス文学叢書

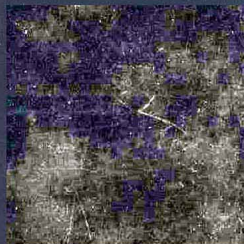
1

指

輪

H. ヴィッテンヴァイラー作

田中泰三訳



早稲田大学出版部

指

輪

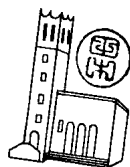
H. ヴィッテンヴァイラー作
田中泰三訳

早稲田大学出版部

指 輪

〔スイス文学叢書1〕

1977年7月20日 初版発行



早稲田大学出版部

著 者 H. ヴィッテンヴァイラー

訳 者 田 中 泰 三

発 行 者 城 下 幸 雄

発行所 早稲田大学出版部

〒160 東京都新宿区戸塚町 1-103

振替東京3-1123 電話(03)203-1551

1398-1701-9314

安信印刷・東栄社製本

目 次

この書は題して「指輪」……………	一
前 置 き……………	三
第一部 求 愛……………	五
百姓たちの馬上試合……………	七
懺 悔……………	三
太刀 打ち……………	七
あとの試合……………	六
セレナーデ……………	四
牛小屋での出会い……………	四
屋上での災難……………	四
メツリの幽閉……………	四
婦人へのかしずき方……………	四
誘 惑……………	六
メツリの恋文……………	六

仲介女	四
-----	---

第二部 婚礼	七
--------	---

結婚論議	九
------	---

縁結び	二〇
-----	----

メツリ家の親族会議	二五
-----------	----

ベルチイとの宗教問答	二二
------------	----

学習者心得	二三
-------	----

俗人のための宗教信条	二五
------------	----

健康法	二三
-----	----

道徳講話	二八
------	----

家政訓	二四
-----	----

挙式	二五
----	----

結婚式の客たち	二五
---------	----

祝宴	二五
----	----

舞踏	二五
----	----

第三部 武勇	二五
--------	----

乱闘騒ぎ	一七
ニッシンゲンの軍事会議	一五
結婚第一夜	二〇
ラッペンハウゼンの軍事会議	二五
都市会議	二七
援軍の到来	三三
村長シュトゥルデルの演説	三二
ニッシンゲン勢最後の準備	三〇
ラッペンハウゼン側の最後の戦闘準備	二四
魔女 対 小人	二四
巨人 対 小人	二五
英雄 対 巨人	二五
異教徒 対 英雄	二五
シュヴァイツ兵 対 異教徒	二五
ラッペンハウゼン 対 ニッシンゲン	二六
裏切り	二七
包囲攻撃	二七

終章	二七
訳者略注	二五
訳者付録 聖書の引用ないし関連箇所	二六
訳者あとがき	二八

凡例

- 本文中の*印は訳者略注を示す。
- 詩行右肩の数字は原文の通算行数をあらわす。
- テキストに散在する聖句、格言、諺などのうち、聖書からの引用については、その個所を一括して巻末に掲げた。

この書は題して「指輪」

前 置 き

崇高なる三位一体、

母にして乙女マリア、

さらにすべての天使たちに対し、

たたえ、敬い、仕え、

善人が喜び、楽しみ、

悪人が悲しみ、心を痛めるよう、

ここに聞き給え、

「指輪」という物語を

(その中には宝石がちりばめてある)。

一〇 そもそもこの本は随所で

世の成り行きを示し、

何をなし、何をなすべきでないかを伝える。

どんな指輪もこれにはかなうまい、

心して読みさえすれば。

これは三つの部分に

大きく分かれたる。

第一部は愛の奉仕で、

それには馬上の槍試合と、

語りと歌と、

二〇 そのほか。

第二部は、

霊肉の道、

世に処する道を諄々と説く。

これをこそ全篇の精髓と思つてほしい。

第三部は、

男子のとるべき態度、

戦場での

斬り込み、攻撃、一騎討ちに。

それで本書の成果はといえ、

三〇

一にみやび、二に人間の規律と美德、

三に武勇。

ところが、とかく人間は堅苦しい話が嫌いで、

まともなことは聞きたがらない、

滑稽なたとえを抜いたのでは。

さまざまな変化を楽しむ。

そこでわたくしは百姓の浮かれ騒ぎを

この教えに組み入れた。

その方がいっそう神に目を向けさすだろう。

双方には色分けがしてある。

四〇頭文字が赤はまじめな部分、

緑色は百姓の暮らし。

ただし、ことわっておくが、

わたくしのいう百姓とは、

不正を働き、愚かな振舞いをする者のことで、

おのが手の勤勞で

さかしく世過ぎする者のことではない。

なぜならば、後者がわたくしの見るところ、

祝福された人たちに違いないからだ。

万〇一みなさんがこの本を

五〇役にも立たぬつまらないものと思うなら、

絵空事ととっていい

——そうハインリヒ・ウイッテンヴァイラーが述べている。

人の心を明るく楽しませながら、

ここに物語がはじまる次第。

第一部

求

愛

百姓たちの馬上試合

グ^{*}ラウゼンの谷あいに、

ラッ^{*}ペンハウゼンという村が、

美しいたたずまいをみせている、

森も水も豊かに。

そこで愚かな小百姓、

六〇 苦勞知らずに世を渡る。

その中に一人の若者がいて、

名をベル^{*}チイ・トゥリーフナス、

もったいぶって誇り高き男である。

木彫り人形の風体で、

休みとあらば、人なかをぶらついた。

姿勢のよい者、悪い者、

近くにいる者、遠い者、

すべて若旦那と呼びかけなければならなんだ。

これ以上多弁は要りますまい。

七〇

いとも見事な振舞いに、

かみさん連中、娘ども、

彼の周りに集まった。

ところが実はというに、

彼の心は一人の娘が占めている。

娘の名はメ^{*}ツリ・リュエレンツムプフ、

上品ぶるが、あしなえで、猫背、

歯と両手はさながら木炭、

唇はルビー色、

ネズミの尻尾のお下げ髪。

八〇 喉元がはれ、

腹の下まで届かんばかり。

みなさん、お聞きあれ、

いかに背が曲がっているか、

その上で釣鐘が造れそう。

足は幅広の甲高で、

どんなに風が吹きつけても、

彼女は決して倒れない、

彼女がただ負けまいとすれば。

ほおは燃えさしのバラ色、

胸板は革の巾着ほどに小さく、

目は立ちのぼる霧のようにきらきら光り、

息はイオウのにおいがする。

衣服が胴にぶらさがり、

魂の抜けがらとはこのことか。

彼女の動作は

三歳の童子なみ。

みなさん方、こんな話はつづけますまい。

ところが、彼女はどこへ行っても大持で、

それでベルチイ、

いとしいメツリのことばかり、

恋うるあまりに

身が細る。

かくて求愛がはじめられ、

武芸試合の運びとなる。

ある日曜日のこと、

ベルチイは、

恰好いい仲間十二人打ちそろい、

ラッペンハウゼンの緑の草地に現れた。

彼らは意気張り鞍の上、

見れば豪雨に打たれたよう。

先頭切るはわれらがベルチイ、

水差しそっくりの雄々しい姿、

盾の家紋は積み肥用の二本の熊手、

彼はそれにご満悦。

次なるは納屋住みのクオントツ、

この者は木立ちの中の苔のよう。

盾にえがける文様は

緑の地に死んだウサギ。

三番目はクノツツ、

これぞ悪名高き男たり。

この男の紋章は

二本のサ克蘭ボもぎ。

四番目は田舎紳士のトゥロル、

そのいかつさはまさに揚げパン。

これなるしるしは大熊手、

まさしく頑丈。

五番目は山羊を連れたハインツォー、

貴族や騎士を気どり、

司祭から授かった地紋は

^{一三〇}ブドウ一粒と三個のクルミ。

六番目はツヴェルク、

山育ちの上流の男で、

これなる定紋、

コップの中にハエが三四。

七番目は人呼んで

アイゼングライン——いきまく男。

陣羽織にのぞく紋は

大皿の上にサジが九本。

第八の男はこのわたくしのもとと、

^{一四〇}手首に筋腫のあるブルクハルト伯。

つけたる紋様、

パタで焼いた二つのカブラ。

九番目にはわたくしが名をつけて、

^{一五〇}ペンツァ・トゥリンカフィル。

この者の盾にあるは、

鋤を引く雄牛ども。

十番目は手におえぬ代物で、

その名、^{*}イエツケル・グラービンスガーデン。

祖先伝来の紋がらは、

^{一五〇}乾燥棚の牛四頭分のチーズ。

十一番目の名前は、

これぞ定かにリュエフリ・レクデンシュピース、

選ばれての村の長、^{おさ}

その紋所は多数の卵。

しんがりに控える者の名をわたくしは知らない。

しかし、試合場へ乗り込むに、

キツネの尻尾の図がらをつけていた。

思うに、百姓の敵たる

粋な騎士ナイトハルトらしく、^{*}

^{一六〇}田舎者をばさげすんでいる。

一行の旗印はまことに見事、

コウノトリの巢の中にいる一頭の子牛。

それを皆がこぞって、

娘メツリを祝して運ぶ。

カブトは籠のように編んであるから、かぶつていても息はつまらない。

その下に結ばれて盾が垂れ、

これは農具のトウミである。

着衣は粗織りの布で、

^{一七〇} 干し草とワラがいっぱい詰めてある。

すね当ては

木の皮。

みんな騎士を氣どつて

馬上ゆたかといいたいが、

乗っているのはロバと駄馬。

ユダヤ人でもうんざりしよう、

毛布やずだ袋が

馬飾りのつもりなのだから。

そして、槍はバン屋の火かき棒。

^{一八〇} 彼らはあちこち駆け回るが、

それにはバグパイプ吹きグンテルファイも一緒。

この笛吹きはバグパイプを真つ二つに吹き割った。

皆は大声で、

「さあ、金持ちも貧乏人も聞いてくれ。

ここで手合わせしたい者、

盾と槍とを打ちやぶらんとする者に、

すべての女性の名誉にかけ、

われらがお相手もうそうぞ」

だがしかし、だれひとり名乗り出る者もなく、

^{一九〇} 一向彼らに立ち向かわない。

それでベルチイ、

身分を忘れず、

仲間の者に申すには、

「たとえわが命にかかわろうと、

愛の奉仕は、

馬上試合によって行われねばならん。

相手が一人も出ぬとあらば、

われら同士で攻め合うといったそう」

この言葉を一同喜んで、

^{二〇〇} グンテルファイに呼ばわった。

「親愛なる吟遊詩人よ、笛を吹け、

謝礼はうんとはずむから」